

自分にとって大切な資料も、その価値を認めない人々にとっては、単なる紙屑の山である。そこで、自分の生命の充実した内に、この古書及び資料を寄贈することにした。

(一) 東京慈恵会医科大学への寄贈

大滝紀雄先生に御願いして、本年(一九九八)三月十七日、高木兼寛先生の書、初期の医学生生の筆記ノート・アンダーソンの描いたと思われる人体解剖書・成医会講習所の学生と、海軍軍医学学校の学生の並んだ写真等を、直接岡村哲夫学長先生にお渡しして慈恵会医科大学の資料館に納めさせていただいた。

(二) 神戸大学医学部に寄贈

岡田安弘生理学教授の御来訪を受け、神戸医学校生「池田宇之助」の講義筆記ノート(明治十八年)の内科学・外科学等八冊を寄贈し、神戸大学医学部五十年史に掲載された。

(三) 日本医科大学校史編纂室へ寄贈

数百冊の「済生学舎」の資料、全てを寄贈して、自分の医史学研鑽の指標としたい。

10 古河市にある医学資料と保存

川島 恂 二

関東平野の中心古河の地は万葉東歌の頃から平安・鎌倉・室町へと武士蟠踞の地であり、室町末から足利氏鎌倉幕府が古河に逃避して来た為に、初代足利成氏から二代政氏の移行期に阪東足利学校から医聖田代三喜を迎えた。

それで戦乱関西を避けて足利学校に学んでいた曲直瀬道三が学成って、京への帰路古河の三喜に入門して李朱医学を学んだ。

古河には三喜の墓と、三喜・道三とが死の別れに二人の涙を硯に落として書いた医書「涙墨紙」のみが残った(古河歴史博物館蔵)。三喜の木像・過去帖は古河市一向寺にある。

江戸時代徳川幕府となると岩槻・古河・宇都宮は日光街道の將軍宿城の重要拠点となった為に多数の有力譜代大名が交代で来城し、初代小笠原から松平(熊沢蕃山の墓)、奥平

(肥後の地で前野良沢)、永井、土井(前期は鳥羽城から唐津城へ。後期は唐津城から古河)、堀田(佐倉藩で順天堂設立)等々十二藩の移動があった。

土井藩は越前大野(利忠時代に洋学藩)と刈谷(隣藩田原に華山。少々洋学)に支藩があつて、全藩共通で蘭学を入れた。

古河土井藩が鳥羽城時代は蘭医河口良閑を迎え、中江藤樹系学者を多く召抱え、唐津に移城してからは、島原藩と交代で長崎奉行を管したので、蘭学を直々長崎から吸収した。

取り分け河口信任が長崎栗崎道意門下で蘭医となり以降の古河焔城後は、蘭学者鷹見泉石を指導した。よつて佐幕開港古河藩となり、古河藩からは杉田玄白一族門下、大阪適塾門下、伊藤玄朴の象先堂門下の医者が多発した。

中でも河口家は足利義輝に仕えた水軍の将で、松浦藩に召抱えられてポルトガル医学の初期及び長崎蘭医学カスパー門下となり、累代医学で土井藩に仕えたので、歴代河口家の医学資料の殆どは古河歴史博物館に寄託されてある。

他の土井藩召抱え漢方医系の医書も少しく古河歴史博物館に集まつて来ている。この博物館は筆者が設立・建設委員長となつて、バブル期に完成したので、古河の医学資料の永久保存は可能となつた事は、欣快に耐えない。

11 史的医学建築物の保存を訴える

小林 晶

医学史上大切な資料は散逸を防止し、保存に全力を挙げなければならぬが、建築物に関しては規模が大きくなるため、どうしても実現が困難なことがある。

私の母校で起こつた残念な事柄をここで恥じを忍んで例証として示して、今後医史学会としての取り組みを懇願したい。

九州大学医学部解剖学教室講堂は明治三十六年八月に完成している。私が最初の講義を受けたのはこの講堂であつた。医家出身でない私にとって医学に関する講義が、いかに新鮮に感じられたか筆舌に尽くし難い。さらに、この講堂が明治の香りがする木造階段教室で、幾多の先輩が使つた机について、白熱電球の下での雰囲気はそれだけでも陶醉させるものがあった。春は桜に囲まれる講堂は、新入生にとって眩いばかりの印象を植え付けた。

最初の金関丈夫教授(山口県土井ヶ浜遺跡発掘調査にあつ